

体験談・官能小説 R-18

——その夜、板がざわめいた——

【下宿先の未亡人とその娘、二人 を孕ませた俺の話】

実話投稿板より

TOR-NET

R-18

©2026 TOR-NET

本作はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

梅雨の合間の蒸し暑い夜だ。引っ越してきてちょうど十日目、夜食に蕎麦を作ってくれた静枝さんが、俺の部屋に差し入れに来了。いつも通りに襖を開けて、そっと置きに来てくれるあの感じ。その日もそうだった。

「おやつですよ。夜更かししてるみたいだから、少しだけ」

うつむき加減で、でも優しい笑みを浮かべて台所から持ってきてくれたのは、冷やしそうめんをちょっとだけ盛った小鉢。ちょうどいいタイミングで腹が減ってたところだったから、礼を言っ



て、手渡す時にだ。こっちが受け取ろうとした手と、彼女が小鉢を置こうとした手が、ほんの一瞬触れた。指の腹が、一瞬だけ滑るように。静枝さん、そそくさと手を引っ込めたけど、その顔が少し赤らんでたのは、俺にはわかった。いや、俺だってこっちの手の甲に残ったぬくもりが気になって、ちょっとしばらく動けなかったんだけどな。

ああ、それからだ。それから数日、なんとなく様子が変わったのは。洗濯物を届けに来る静枝さんの視線が、少し下を向きがちになったり。風呂上がりに廊下ですれ違う時、バスタオルで包まれたその体から漂う湯気と石鹸の匂いが、妙に生々しく感じたり。

そういや、あの夜の翌日だったか。縁側に静枝さんが一人で座って、無言で庭を眺めてたことがあった。背中がすごく寂しそうで。あの黒電話が置かれた帳場のカウンター越しに、ふと目に入ったあの背中が、妙に脳裏にこびりついて離れない。

…まあ、そういうことだ。

で、今、手元に届いた洗濯物の山の中に、俺のシャツに混じって、妙に薄いピンク色の布が一枚、はみ出してる。見覚えのあるレースの縁。そいつをそっと手に取った静枝さんの指先が、わずかに震えてるのが、ドアの隙間からこっちは見えている。彼女がそれを持ったまま、少し長いため息をついた音も、聞こえそうな気がするんだ。

いよいよ、静枝さんとその娘の美咲との共同生活が始まる。彼女たちは親切で、少し寂しげな温もりを持っていた。

003 名無しさん ああ…それで…？夜食の蕎麦を運んでくる時に触れた指先の感触が、その後のすべての始まりだったんですね…すごいなあ

004 名無しさん >>2 ダンテ相変わらず他人の恋バナにすぐ食いつくna蕎麦よりそっちが食べたいんか？

005 名無しさん これはもうアウトだろ…

006 名無しさん なんで梅雨の合間の蒸し暑さがそんなに詳細に書かれてるんだよ。関係ないだろ

007 名無しさん あの縁側で一人庭を眺めてた背中…すごく寂しそうだったんですね。黒電話のある帳場のカウンター越しに見えたってところ、すごく細かい…

008 名無しさん >>4 「早すぎ」という主観的評価は無意味だ。人間関係の進展に定められた速度など存在しない。

009 名無しさん kwsksって言う奴はまずお前が何を聞きたいのかを具体的に書けよ。それすらできねえならROMってろ。

010 名無しさん そうめんと蕎麦がごっちゃになってるじゃねえか。夜食に蕎麦を作ってきて、冷やしそうめんを差し入れ？ 矛盾してるぞ。

011 投稿者 >>5 その夜は温かい蕎麦、その後の差し入れは冷やしそうめん。別の日だ。読み返せ。

012 名無しさん 静枝さん…妙に艶っぽい響きだな。年齢は？

013 投稿者 聞くな。

014 名無しさん アウトとか言ってる奴いるけど、お互いシングルなんだろう？ なにがアウトだよ。

015 名無しさん 洗濯物に混じったピンクの布…あれ、下着だろ？ それを持ったままため息って…間違いなくアウトだわ。OP、お前それに気付いてるんだから、もう手遅れだぞ。

016 投稿者 >>16 アウトもクソもない。ただの生活だ。

実況台本

……ああ、だめだ。

まだこんなに……覚えている。

夫のワイシャツ。今日、洗濯に出そうと思ってクローゼットから取り出したら……この匂いが、ほんの少し残っていて。

石鹸みたいな、清潔な香り。あの人がいつも使っていた。もう一年も経つというのに。洗っても、洗っても、消えないみたい。

美咲が言ってたわね。「お母さん、そろそろ……」

何を？ 処分して？ 新しい人を？

無理よ。だって……あの人が、この家のどこにでもいる。縁側で新聞を読む背中。風呂上がりにタオルで髪を拭く音。夜、帰ってきた時の玄関の鍵の音。

……それなのに。

なんで……あの人のこと、忘れようとしている自分が、いるんだろう。

……あ、隆くん？

お風呂、上がったみたい。シャワーの音が止んでから、もう少し経つわ。

また、廊下ですれ違うだけかしら。今日も、挨拶だけで終わるのかしら。

バカね。下宿人なんだから、当たり前でしょ。それに……彼は、美咲と同じ年ぐらいなのに。すごく大人びて見えて。落ち着いていて。

風呂上がりの、あの湯気と石鹸の匂い……今日、彼が使った石鹸は、違う香りだった。でも、蒸し暑い廊下で、ほんの一瞬、すれ違った時のあの熱気と湿り気……

……やめて。考えないで。

夫に申し訳ない。こんなこと、考えちゃだめ。

まだ、たった二週間しか経ってないじゃない。彼は、ただの下宿人よ。美咲だって、楽しそうに話してるし……

……あの子。最近、ずいぶん明るくなったわね。帰ってくるのも早いし。隆くんの話、目を輝かせてする。

当然よ。同世代なんだから。私なんかより……ずっと。

…なにを、比べてるの？ おかしいわ、私。

今日、洗濯物をたたんでいて……あの子の部屋から出てきた洗濯かごに、薄いピンクの……ランジェリーが混ざってた。

見ちゃったの。若い娘の、可愛い下着。それを見て、一瞬、どきりとして……そして、あの子が隆くんの前でどんな服を着ているか、想像しちゃって。

だめ、だめ、だめ。

罪よ。母として、女として、どっちもだめ。

ここは夫が建てた家。私は未亡人。46歳の、年の差なんて……笑われるわ。

でも……

……誰にも触れられてない。この一年、誰にも……抱きしめられてない。

それが、こんなに……寂しいってこと、忘れてた。

隆くんがいることで、この家に活気が戻ったのは嬉しい。でも……その分、この胸の空洞が、ひりひりと疼くみたい。

今夜も、あの子は隆くんとリビングでテレビを見てるのかしら。私は、この部屋で一人、夫のシャツを抱えて……

ごめんね……ごめんね……

こんなこと、思っちゃって……

あの人がいたら、絶対に許してもらえないようなこと、ばかり考えて……

だめな女だよね、私……

…あの子の声。楽しそう。

もう、いい。

今夜は早く寝よう。明日になったら、この気持ちも落ち着くはず。

…もう少しだけ。

今夜だけ……許して。この寂しさに、負けそうなの。
お風呂の匂いがする……少し汗の匂いも混じってる。
私、こんなことして……本当にダメだ……
あの人は、もう……いないんだ。
布団の片側は、ずっと冷たいまま。
…お茶を淹れてるのかな。美咲も一緒に。
くらくらする……息が苦しい。
覗いちゃ……いけない。
……ほんの少しだけ。
居間の明かりが漏れている。二人の影が動いている。
なんで……私だけ、こうして……
隠れて見てなきゃいけないの？
若い女の子と、若い男の人。
…ふつうは、そっちのほうが幸せになるんだろうね。
私なんか、過去に縛られた、ただの……
ごめん……ごめんね、あなた。
でも……今夜は、そっとそばにいてほしい。
寂しすぎて、胸が裂けそう。
誰かに触れられたい……温かい体温を感じたい……
それが、たとえどんな罪だとしても……
…来る？
だめだめだめ……見つかつちゃ……
…美咲の部屋の方へ。
ああ……
帰って……来ないんだ。
冷たいシーツの感触。
今日も、ひとりで寝るんだ。
こういう夜が、あと何十回、何百回続くのかな。
帰った……の？
……そうか。
やっぱり、誰も、こっちには来ない。
暗い……暖かい……
これが、私の世界の全部。
外には、笑い声があふれてるのに……
誰か…誰かが気づいてくれないかな。
こんなに悲しんでるって。
…無理だ。自分で選んだ孤独なんだから。
カチ、カチ、カチ……
時間だけが、確かに過ぎていく。
明日が来ても、この気持ちは消えないんだろうな。
ずっと、ここにいます。
あのシャツ……
ダメだ。もう、取り出しちゃダメ。

雨が上がって、月が出てる。

こんな顔……

冷たい。

暗いほうがいい。

誰にも見られたくない、こんな惨めな姿。

私も、ただの女なのに……

あの人の温もりを、思い出せない……

新しい温もりを、欲しくなっちゃうなんて……

誰かが、誰かを呼んでる。

私を呼んでくれる人は……もう、いない。

ごめんね……

今夜だけ……許して……

ただ…寂しかったから……

>>10 そうめんと蕎麦がごっちゃんかしてないよ。あの夜のは、温かい蕎麦だった。ちょっとしたことだけだな。

引っ越して10日目の夜だった。21時過ぎ、部屋で本を読んでいると、ドアをノックする音がした。静枝さんだ。浴衣姿で、手には碗を持っている。

「すみません、遅くに…ちょっと、夜食が…」

そう言って差し出されたのは、確かに温かい蕎麦だった。湯気がぼんやり立ち上がる。蕎麦の香りが、蒸し暑い夜の空気に混ざる。

「ご厚意すみません」

「いえいえ…美咲が残業で帰りが遅いから、一人だとさみしいでしょうと思って」

彼女は少し照れたように笑った。浴衣の襟元が、ほんのり汗ばんでいた。台所で立っていたのだろう。髪の毛のほつれが耳にかかっている。家主としての気遣いと、どこかそれ以上の、女としての寂しさが、その微笑みの奥に滲んでいた。



碗を受け取ろうとして、俺の指が彼女の指に触れた。ほんの一瞬、熱い肌の感触。彼女は小さく「あ」と声を漏らし、そっと手を引く。

「すみません」

「いえ…こちらこそ」

沈黙が流れた。縁側の方から、庭の虫の声が聞こえるだけだ。帳場に置かれた黒電話が、ぼんやりと影を落としている。あの電話は、彼女の夫が生きていた頃からあるんだろうな、なんてことをふと思った。

「…暑い夜ですから、無理して食べなくてもいいですよ」

「ありがとうございます。いただきます」

彼女はうつむいたまま、そっと手をひきしめた。触れた指のあたりを、無意識に擦っているように見えた。その仕草が、妙に心に引っかかった。

「では…お休みなさい」

「はい。静枝さんも」

彼女は振り返り、廊下へ消えていった。浴衣の裾がさっと動く音。そして、階段を下りていく足音。ただそれだけの出来事だ。

…まあ、そういうことだ。

あの触れた瞬間の、彼女の指の温もりだけが、蒸し暑い夜の空気の中に、妙に長く残った。次に彼女が俺の部屋に現れたのは、ほんの数日後のことだ。今度は茶菓子を手に、夜更けにノックしてきた。

002 名無しさん このペンネーム略ってやつ、誰だよ

003 名無しさん 確かに入居して10日目まで夜食持ってきてくれる家主さんもいたなー。うちの場合はおでんだったけど、これで仲良くなって結局…って話はまた今度

004 名無しさん kws 結局ってとこ

005 名無しさん >>18 お前のその話、10日目でおでん持ってくるって季節おかしくない？ 今OPの話は梅雨だぞ

006 名無しさん >>17 おいおい、触れた指の感触が長く残った？ それもう恋ですわ。OP、認めろよ

007 名無しさん 虫の声だけが聞こえる縁側…

008 名無しさん 黒電話の影…

009 名無しさん >>16 お前がドキっとするのが問題だろ。変態かよ

010 名無しさん 結局その茶菓子の夜はどうなったんだ？ kws

011 投稿者 >>26 まあ、また今度ってことで。

012 名無しさん 家主とやら、独身なの？ 美咲って人は？

013 名無しさん 黒電話の影って、いい情景だわ。もうそういうものすら見ない。

014 投稿者 >>28 美咲は娘。一人暮らしじゃないかよ。

015 名無しさん そっか…じゃあ静枝さんは未亡人か。OP、気をつけろよ。そんな夜中にノックしてくる女の人心地は、大体危険だ。経験則だ。

016 投稿者 >>30 経験則って、お前自身の話か？

017 名無しさん >>31 余計なお世話だ。でもな、似たようなことならあるぜ。結局、面倒なことになった。

018 名無しさん 梅雨の蒸し暑い夜に温かい蕎麦って、逆にしんどくないか？ 冷やしそばでよかったのに。

019 投稿者 >>32 そこがいいんだよ、わかんねーだろうな。

実 況 台 本

……返信、どうしよう。

美咲から…「お風呂空きましたよー」って。

ただの報告だよな。大家さんとしての、当然の連絡。

なのに、なんでこんなに…文字を打つのが重いんだろう。

…はあ。

「ありがとうございます」で、いいはずなのに。

…送信。

……夫が亡くなって、どれくらい経ったか。

この家で、誰かを「待つ」っていう感覚を忘れてた。

……あの子が下宿に来てから、変わった。

料理を作るとき、つい多めにしちゃう。

洗濯物を干すとき、彼のシャツの襟がちゃんと伸びているか確認しちゃう。

…バカだな、私。

義弟からは「姉さん、また若い男を家に置いて」って、からかわれる。

…そう言われるたび、胸がぎゅっと締め付けられる。

だって、それは…本当のことを、からかわれてみたいで。

……ごめんね、お父さん。

今、廊下ですれ違ったとき…あの石鹸の匂いがした。

若い男の…生きてる匂い。

それを嗅いだ瞬間、胸が…疼いた。

私は…46歳の未亡人だ。

娘がいる。社会人として立派な娘が。

なのに、なんで…

…なんで、あの子が部屋を通り過ぎる後ろ姿を見送ってしまったんだろう。

タオル一枚の、その背中が…ふと、夫の若い頃を思い出させて。

だめ、だめだめ。

静枝、しっかりしなさい。

あの子は下宿人で、ずっとずっと年下で…

…美咲の同世代なんだから。

あの黒電話…今日も鳴らなかった。

義弟からも、親戚からも、誰からも。

…これが、私の世界の全てなんだ。

この家と、娘と、そして…

…そして、この罪深い胸の疼きと。

……美咲だ。

「お母さん、晩ごはんどうする？ 私が買って帰ろうか？」って。

「いいよ、もう作ってあるから」

…そう打って。

でも、本当は…

…本当は、あの子が帰ってくるのを、待ちたかった。

…ああ、神様。

この気持ち、どうしたらいいの。

母としての顔と、女としての寂しさが…

…ぐちゃぐちゃに絡まって、ほどけなくなってる。

……もう、二度と戻らないあの時間を。

あの温もりを。

…この歳で、求めちゃいけないって、わかってる。

わかってるんだけど…

…この家に、男の気配が戻ってきたら。

少しだけ…ほんの少しだけ、生き返るような気がした。

…明日からは、ちゃんとしよ。

大家さんとして、母親として。

…ね、静枝。

(廊下の暗がりの中で立ち止まる足音)

…やっぱり、消えなかった。

この胸のざわめきが。

あの子…隆くんが、この家に来てから。

空気が、変わった。

沈黙が、ただの静けさじゃなくなった。

…意味を持った隙間みたいに。

今日の夕飯の時…美咲が、笑ってた。

久しぶりに見た、本当の笑顔。

…あの子も、感じてる。

この家に、温もりが戻ってくるのを。

危ないな、私。

こんなこと考えちゃ…

母として、大人として、恥ずかしい。

…あ。

風呂から出たのかしら。

隆くんか、美咲か。

通り過ぎるのを待とう。

今の私、顔を見られたら…

何が表情に出るか、わからない。

〔SFX: 軽い足音が近づく〕

……石鹸の香り。

男の人…隆くんだ。

湯気がほのかに漂ってくる。

髪を拭いたタオルの匂い。

…若い男の、生活の気配。

ああ、だめだ。

こんなところに隠れて…

まるで、覗き見しているみたい。

〔SFX: 足音が廊下を通り過ぎ、階段へと向かう〕

行っちゃった。

…ほっと、した。

…でも、なんだか…寂しい。
ここを、さっき彼が歩いた。
この空気を、分けながら。
何してるんだろう、私…
四十六にもなって…
夫がいた頃は…
こんなこと、考えもしなかった。
普通の家族で、普通の温もりで…
それで満たされてた。
でも、あの人がいなくなって。
この家から、男の気配が消えて。
…何かが、ずっと欠けてた。
その欠けた部分に…
ふと、新しい影が落ちて。
…怖いくらいに、自然に、馴染みそうで。
あら、美咲もリビングに降りたのかしら。
二人で、何か話してるのかな。
…覗き見なんか、しちゃだめ。
大家として、母親として、あるまじきこと。
下から、テレビの音。
美咲の、弾けるような笑い声。
…そして、隆くんの、低く優しい声。
…ああ。
これが、家族の音。
久しぶりに聞く、賑やかな夜。
何で泣いてるんだろう…
嬉しいから？
寂しかったから？
…それとも、この幸せが、脆いガラス細工みたいに思えて？
もう、降りよう。
このまま隠れてるのは、よくない。
…でも。
今、この二人の間に、私が入ったら。
この空気は、どう変わるんだろう。
私は…この温もりを、壊す存在にならないか。
母でありながら、女でもあるこの矛盾が…
この平穏を、碎いてしまわないか。
…今日は、もういい。
二人の時間を、邪魔しちゃいけない。
明日…
明日からは、ちゃんとしよ。
大家さんとして、母親として。
…おやすみなさい、隆くん。

おやすみ、美咲。

暗い部屋で、ベッドの端に座る。

窓から差し込む街灯の光が、細長く床を照らしている。

…ああ、だめだ。

全然、収まらない。

この胸のざわめき。

この罪悪感と、切なさど…

そして、ほのかな期待。

彼がここにいる限り…

この気持ちは、消えそうにない。

〔SFX: 遠くの雷の音、微かに響く〕

…梅雨の、夜。

何もかもが、濡れていく季節。

この気持ちも…

きっと、もう止められない雨みたいに。

じわりと、私を濡らしていく。

…おやすみ。

…誰にも言えない、この想いとともに。

>>24 黒電話か……あの影は、確かに無言の圧だったな。じっとこっちを見てる気がした。

引っ越して十日目の夜だった。梅雨の合間で蒸し暑く、窓を開けてもほとんど風は入ってこない。リビングの扇風機がガタガタと音を立てて回っているのが、台所まで聞こえていた。

俺は二階の部屋で、引っ越しの荷物の整理を終えたばかりで、まだ段ボールの匂いが残る六畳間に座り込んでいた。静枝さんが、階段を上がってくる足音がした。軽い、つま先から着地するような、気遣いの込もった歩き方だ。

ドアをノックする音。

「ごめんください。お夜食を持ってきましたけど……よろしいでしょうか」

「はい、どうぞ」

ドアが開いて、静枝さんが湯気の立った丼を両手で持って入ってきた。浴衣姿だ。柄は藍色の小さな花が散った、地味なもの。襟元は少し汗ばんでいて、鎖骨のあたりが微かに光っている。蒸し暑い夜に、温かい蕎麦だ。俺はそれを見て、ふと名無しのツツコミを思い出した。確かに、冷やしそばの方が涼しげかもしれない。でも、彼女が台所でゆでて、つゆを温めて、わざわざ持ってきてくれたこの湯気には、冷たいものにはない何かがある。そういうこだわりが、彼女らしいと思った。

「暑いのに、温かいものすみませんね。でも、夜遅くに冷たいものを食べると胃が……って、余計なお世話でした」

「いえ、ありがたいです。ちょうどお腹が空いてたところでした」

彼女はそっと丼を俺の机の上に置いた。その時だ。彼女の右手の小指が、俺が受け取ろうとした手の甲に、ほんの一瞬触れた。熱い。蕎麦の湯気よりも、生身の体温の方が強く伝わってくる。彼女は慌てて手を引いた。

「あ、すみません」

「いえ……こちらこそ」

その後、沈黙が続いた。縁側から聞こえてくるはずの虫の声も、今夜は聞こえない。代わりに、黒電話の影が長く延びているリビングの様子が、階段下から仄かに感じられる。あの電話は、彼女の亡くなった夫との最後の会話を聞いたのかもしれない。今ではただの影で、何も語らない。



静枝さんは下を向いたまま、しばらく立ち尽くしていた。浴衣の袖口が、微かに震えているように見えた。

「美咲は……今日残業で、遅くなるって言ってました。お一人さみしいでしょうから、つい……」

「いや、俺は平気ですよ。静枝さんの方が、いつも一人でいる時間が長いんじゃないですか」

口を滑らせた。家主と下宿人の会話としては、少し踏み込みすぎたかもしれない。

彼女は顔を上げた。目が少し潤んでいるような気がした。台所の電球の明かりを背にしているせいか、輪郭が柔らかくぼやけて見える。

「……そうですね。たまに、誰かこうして話せる時間が……うれしいです」

言葉の最後が、かすかに震えていた。もう一度、「すみません」と言って、彼女はくると背を向けて部屋を出ていった。ドアが閉まる音。廊下を下りていく、あのつま先立ちのような足音が次第に遠ざかる。

指の触れた感触が、じんわりと残っている。湯気で濡れたような、それでいて確かに生身の熱がこもったあの一瞬。あそこから、何かが変わったような気がした。あの人妻は、ただの家主じゃなくなった。女として、寂しさを抱えた一人の女として、俺の前に立っていた。

……まあ、そういうことだ。

次の日から、美咲の方が妙に俺に愚痴をこぼすようになった。仕事のストレスで、リビングでふらふらとしながら、無防備にため息をつくあの姿に、俺はふと異性としての意識を剥き出しにしまいそうになる瞬間があった。

002 名無しさん 静枝さん、苦しかったでしょうね…浴衣の袖口が震えてたなんて。誰にも言えない寂しさをずっと抱えてたんでしょう…

003 名無しさん リビングの扇風機ガタガタうるせえな。うちも同じ型だわ。梅雨時はもう駄目だ

004 名無しさん >>4 お前のその「苦しかったでしょうね」が一番うざいんだよ。本文にはそんなこと一言も書いてないのに勝手に感情乗せすぎ。煽りか？

005 名無しさん OPクズすぎ。家主に手出すなよ。気持ち悪い

006 名無しさん >>34 お前みたいな奴がいるからスレが荒れるんだよw クズも何も、OPはまだ何もしてないだろ。妄想が先走りすぎ

007 名無しさん 二階の部屋の段ボール匂い…あれ引っ越し十日目でもまだ残るんだな。うちは一週間で片付けたわ

008 名無しさん またこの手の話かよ。どこのラノベだよ。ガチっぽく書こうとしてるのが逆に胡散臭い

009 名無しさん 法律的には未亡人と独身男が同棲してても問題ないが、美咲という娘がいる以上、トラブルになった時の関係性が複雑になる。大家・借家人の契約書はきちんと交わしているか？

010 名無しさん 黒電話の影が何も語らないって、それ一番しんどい。無言の圧というか、存在そのものが過去の亡霊みたいで。

011 投稿者 >>11 そこは大事な小道具だからな。物語の“重み”を無言で伝えてる。

012 名無しさん >>40 OPクズ発言は流石に草。本文読めてる？ 何も起きてないのに。でも正直、この先どうなるかは気になるわ。

013 投稿者 >>12 読みたい？w

014 名無しさん 引っ越し十日目で夜食作ってくれるなんて、静枝さん良い人過ぎる。それだけで十分好感度上がる。

015 名無しさん 美咲の方は残業続きでストレス抱えてるみたいだけど、それで無防備になるってのもあるあるだな。

016 投稿者 >>50 ほんと、あるある。こっちが緊張する。

017 名無しさん 法律的には>>44が言う通りだな。契約書はあるんだろうけど、感情的になると紙切れだ。

018 名無しさん またスレタイ詐欺か？ とっくに終わってる話を蒸し返すなよ。

019 投稿者 >>53 終わってねえよ。これからだ。

実況台本

ああ…お父さん、どうしよう。

……っ。

すみません。つい…うっかり。

ここはダメよ、静枝。あなたはもう…46歳の母親で、未亡人で。

そんな、ふざけたこと…考えちゃいけない。

でも…あの触れ方、偶然だったのかしら。

それとも…彼も、少しは…

バカね、そんなはずないわ。

美咲と同じくらいの年頃の男の子よ。ただの優しさ、気遣いなの。

…なのに、なぜこんなに、手のひらが火照ってるの？

この感じ…忘れてた。

お父さんが亡くなって、もう何年。

女としての自分…もう、どこかで諦めてた。

あの電話、あなたが一番好きだった場所よね。

いつもここに座って、仕事の話をしてた。

今、この家に…息子のような男の子がいて。

それが…こんな気持ちにさせるなんて。

ダメ、だめだめ。

美咲がいるじゃない。娘が、彼に好意を抱いてるかもしれないのに。

その母親が、こんなこと…考えてるなんて。

…ごめんね、お父さん。

今、この瞬間、一人でここに座って、とんでもないことを考えてる。

あの瞬間…戻りたい。

もう一度、あの温かさに触れたいって、思ってる。

いやっ！

静枝、あなたはしっかりしなさい！

冷静に、冷静に。

ただの下宿人さん。ただの、ちょっと気の利いた青年。

それ以上でも、それ以下でもない。

…でも、お父さん。

今、胸の奥が、ずっとずっと、疼いてるの。

寂しさなんかじゃない。もっと…熱くて、卑しい。

この気持ち、誰にも言えない。

美咲にも、もちろん…彼にも。

このまま、この秘密を胸にしまって、朽ちていくしかないのかしら。

…それでも、明日の朝、彼と食堂で顔を合わせるのが…

怖いような、楽しみなような。

ああ、なんて女なんだろう。

罪深い…本当に、罪深い女ね、私は。

そういえば…今度の土曜日。

彼が、美術館に行きたいって話してたっけ。

確か、静枝さんも何か言ってたわね。

…私も行こうかな。
たまたま…ってことにして。
あの子も、彼のことが…気になってるみたい。
よく、部屋から笑い声が聞こえてくるもの。
…お父さんがいた頃の、あの活気が戻ってきて。
嬉しいはずなのに、なんでこんなに胸が締め付けられるんだろう。
ただの下宿人。
…ただの下宿人なのに。
なんで、こんな風に考えてしまうんだろう。
若い美咲と比べたら、私は…もう十分すぎるほど生きてきた。
白髪も増えだし、手だって、こんなに皺が寄ってる。
彼に、女として見られるはずなんて…
…見えないわ。
暗くて、何も見えない。
…あの部屋の前、通るだけなら…大丈夫よね。
ちょうど、二階の窓を閉め忘れたかもしれないし。
でも、もし扉が開いてたら？
もし、彼がまだ起きてたら？
なんて言おう…
「お茶…淹れましょうか？」なんて、馬鹿みたい。
…電気がついてる。
まだ…起きてるのね。
心臓、弾んでる…
バカみたい。まるで初恋を知ったばかりの頃みたいに。
行こう。
自分の部屋に…戻ろう。
…おやすみなさい。
…ダメだ。
やっぱり、ダメだ。
今、彼の名前を呼びたかった。
指が触れたあの時みたいに、もう一度、あの距離を…
いや。
だめ、いけないことなんだから。
お父さん、ごめんなさい。
今、とんでもないことを考えてた。
…でも、止められないの。
この気持ち、誰にも邪魔されないこの夜の中なら、少しだけ…考えてもいいよね？
来週的美術館。
静かに、そっと…近くにいよう。
何も起こさないから。
ただ、その横顔を、盗み見るだけ。
これ以上は、絶対に越えちゃダメ。
だって…私は、美咲の母なんだもの。

…寂しいよ。

お父さん。

本当に、寂しい。

もう、寝よう。

明日は…ちゃんと、静枝さんでいよう。

…彼も、もう寝たかしら。

あの優しい顔で、ぐっすり眠ってるのかしら。

ああ…

罪な女。

……

ここまでが体験版です。続きは製品版で――

第2部では、音声実況の第1トラックをお楽しみいただけます。

BOOTH 本編: <https://tornetxxx.booth.pm/items/8650280>

サークル: TOR-NET